

2020年 3月30日

京成電鉄株式会社

**東京藝大との連携により、利用しやすい空間に！**

## **京成上野駅 地下連絡通路の リニューアルが完了します**

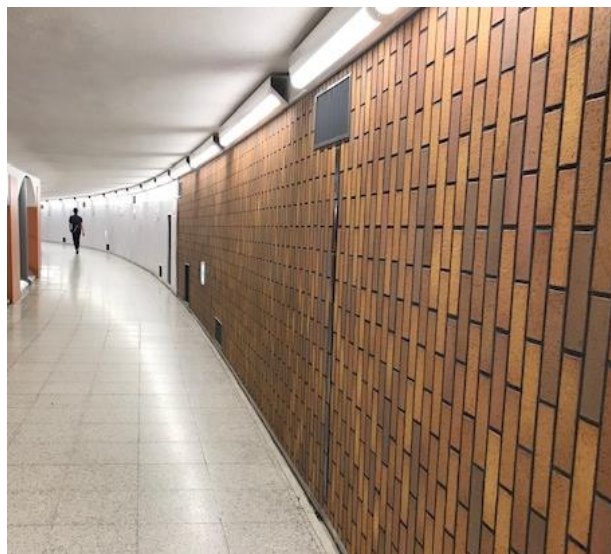
**供用開始：2020年3月31日(火)～**

京成電鉄株式会社(本社：市川市、社長：小林 敏也)では、「連携・協力に関する包括協定書」を締結している東京藝術大学(所在：東京都台東区、学長：澤 和樹、以下「東京藝大」と連携し、京成上野駅と東京メトロ銀座線上野駅を結ぶ連絡通路(以下、「上野連絡通路」)にて初となるリニューアル工事が完了し、供用を開始します。

リニューアル内容として、同大学美術学部のデザイン監修のもと、陶芸研究室製作の壁面タイルを使用し、壁面改修を実施しました。また、全長165mにスピーカーが設置された連絡通路は、音楽学部音楽環境創造科によって調整され、目の不自由なお客様、上野エリアを訪れる訪日外国人など、同通路をご利用いただくすべてのお客様が安心してご利用いただけるよう、時報や多言語による案内放送をお届けします。

京成電鉄は、今後も、東京藝大をはじめ地域社会との連携を通じ、お客様サービスの向上と沿線の魅力向上を図ってまいります。

本件の詳細は次頁の通りです。

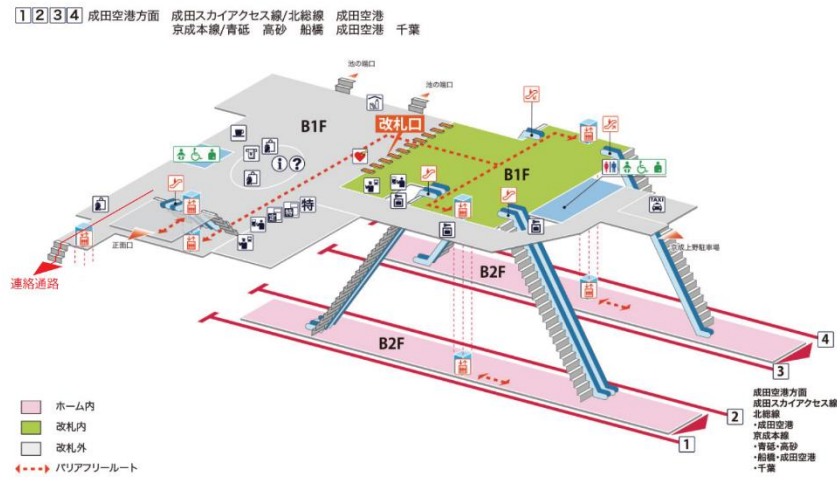


リニューアル後の上野連絡通路の一部

# 「京成上野駅 地下連絡通路」リニューアルの概要

## 1. リニューアル完了・供用開始日

2020年3月31日(火)



上野連絡通路の位置

## 2. リニューアル内容

### (1) 通路壁面の改修

東京藝大美術学部のデザイン監修により陶芸研究室製作の上野文化の杜の各施設などを想像することができる壁面レンガタイルを掲出します。

### (2) 通路内の放送

#### ① 案内放送

外国人のお客様や目の不自由なお客様でも通路内をスムーズにご利用いただけるよう、多言語(日・英・中・韓)による案内放送を実施します。

#### ② 時報

始発・終電時、及び毎時00分のタイミングで、京成電鉄が成田空港と都心を結ぶ鉄道であることをモチーフとし、世界の国々の印象を盛り込んだ「時報」が通路内に設置されたスピーカーから流れます。これは、東京藝大音楽学部音楽環境創造科によって最も効果的な音響になるように制作、調整されており、通行するお客様に、毎時異なる時報をお届けいたします。

(3)その他

通路中央設置の植栽をリニューアルします。



以上

**【参考】東京藝術大学と京成電鉄との連携・協力に関する包括協定の締結について**

東京藝術大学と京成電鉄では、2017年6月26日付で、文化・観光の振興等の分野で緊密な協力関係を築き、地域社会の発展、ひいては日本の芸術文化の振興を図ることを目的とし、京成エリアの魅力向上や文化・観光の振興に関して連携・協力を推進することに合意し、包括協定を締結しました。

これまで、「旧博物館動物園駅」の駅舎改修における出入り口扉のデザイン(2018年)や、京成上野駅のリニューアルに際しての発車メロディーの作成(2019年)など、各分野での連携を進めています。



旧博物館動物園駅 出入り口扉  
(東京藝大美術学部長・日比野克彦氏デザイン)



京成上野駅発車メロディー  
制作の様子

## 【京成上野駅地下連絡通路リニューアルに関するコメント】

### 「全体ディレクション」

東京藝術大学美術学部長 教授 日比野 克彦

### 「CONNECTED TO SOMEWHERE」

この空間を一言で表すならば「どこかにつながっている」という感覚です。地下通路は都会には多く存在しますが、このような曲線を持った長い通路が故に想像力を沸き起こさせる魅力的な場所になっていると考えました。地下だから暗い、曲がっているから先が見えないのではなく、一見難点に見えるものを魅力に変換させることができるのがアート力なのです。同じではなく個性こそが魅力という価値観がアートの特性です。多様な社会を目指す私たちの未来においても、それぞれが持っている他者との違いこそがそのものの魅力としていくアートの力は必要になってくるのです。

京成上野駅地下連絡通路を「どこかにつながっている」と想像的に感じられる空間にするために東京藝大の感性あふれるアーティストたちがそれぞれの感性とこの空間をつなげて体験型の作品につくりあげました。ぜひ、あなたもこの空間からあなたのなかにあるどこかにつながってみてください。

### 「空間デザイン」

東京藝術大学美術学部建築科 助教 森 純平

空港は空の玄関口とも呼ばれる一方で、何処か国境の曖昧な空間です。新しい土地に訪れたとき、それを実感するのは、初めに乗り継いだ車窓から見る街の風景であり、降車した駅の空気ではないでしょうか。京成上野駅はまさに東京の玄関と言える場であり、また、帰国の折に名残を惜しむ最後の空間でもあります。

当駅から JR、東京メトロ上野駅へとつづく地下連絡通路は長さ 165m。緩やかなカーブを描く壁面には、上野公園に集う文化施設をモチーフにしたレンガ調のタイルをあしらっています。藝大陶芸科に伝わる藝大釉のタイルがアクセントとなり、窓のない地下通路と地上とのつながりを演出しています。

### 「藝大オリジナルタイル製作」

東京藝術大学美術学部工芸科陶芸 教授 豊福 誠

#### 「藝大釉について」

日本の陶芸に用いられてきた伝統的な釉薬を基本に、本研究室で独自に調合した陶磁器用の釉薬三十数種の中より陶器用の釉十種を今回使用しました。天然の原料を使っているため、微調整をしながら調合しています。釉掛けの濃度や焼成の温度帯、雰囲気によって変化するちょっと難しい釉薬ですが、陶芸の基本を学ぶ学生にとって重要な教材となっています。釉調や色合いの微妙な変化をお楽しみ頂ければ幸いです。

### 「音源制作」

東京藝術大学名誉教授 西岡龍彦

「時報の音楽」とオープニング、クロージングの音楽は、東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科と大学院音楽研究科音楽音響創造の教員、学生、海外の共同研究者、そして、この学科を卒業して世界で活躍する留学生が中心となって制作しました。この特別な音響空間「Sound Creek(音の小川)」に、世界の国々を象徴する20種類の個性的な音楽が流れます。

### 「音響設計」

東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科 教授 亀川 徹

京成上野駅とメトロとを結ぶ地下通路は、海外からのお客さんを始め多くの観光客のみなさんが通られる空間です。ここを59台のスピーカーで快適な音環境を提供できるように、事前に現地でおこなった音響測定を元に音素材を検討し、この通路での再生環境で実際に聴きながら最終調整をおこないました。ここを通るたびに新しい音の発見がある、といった遊び心のある音体験を提供したいと考えています。

## 「音響設計(地下通路の音響測定について)」

東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科 准教授 丸井淳史

トンネル状になった地下通路でならず音を制作・調整するさいに、あらかじめ通路内での音の反射や残響を把握しておく必要がありました。そのために、列車の走らない深夜にインパルス応答測定を行いました。インパルス応答とは残響音を記録するための方法のひとつで、コンサートホールなどの音響測定や可聴化によく用いられています。今回は特に東京藝術大学千住キャンパスにある立体音響システムによる響きの再現を念頭におき、立体音響用の特殊なマイクロホンを用いて様々な測定位置やスピーカーの組み合わせの測定をしました。地下通路の響きを立体音響システムで再現しながら「音色は聞きやすいか」「響きがあっても音が濁らないか」など、様々なことを確認しながら最終的な音響調整を行っています。